「それにも抱はらず、人は、私は信ずる、次の思想を敢てせざるを得ない。人類のこの地上の發展は、一個の超時間的な生活關聯に織り込まれる。この生活關聯においてこそ人類の地上の流轉の收獲はより廣き進展の中に這入つて行く。斯くて事柄はかうだ。人類の歷史における積極的な、また救濟的な意味は、偏へに、そのより高い他の樣式としての神の世界の生活秩序を通じて將來する。その神の世界の生活とは、言はゞ我々の空間及び時間の世界を截斷し、さうして人類の歷史としてのこの截斷の上に自己を表現しようとするその神の世界の生活なのだ。」（一九三〇年六月十一日）

新刊紹介

心理學概要　上卷　小保内虎夫著

著者は東大卒心理學專攻の文學士、東京高等學校教授。昨年京都に於て開かれた第二回心理學大會に際しては一、禁止作用に關する實驗。二、分割面知覺の實驗。三、斜方向知覺に關する法則。等の數多の新研究を發表せられた好學の士。該研究の結果は二三本書中にも挿入せられてゐる。本書は菊版一六八頁、クロース、紙質もよいものを用ひてゐる。今裝釘上に於けるその特色を擧げると、（一）全部横讀、假名は片假名にしてゐること。從つて、人名術語等は原語のまゝ挿入するの便がある。（二）寫眞版が可成り澤山に挿入せられてゐること。（三）各頁の下方約二寸餘を始め左右に可成り廣い餘白が存してゐること。從つて別にノートを造らなくとも、各自そこへ記入し得る便がある。

更にその内容を概觀すると、二篇から成つてゐて、第一篇が發達心理學として筋肉の反射から條件反射、本能、學習等主として行動に關する部分を最簡單なものから極く複雜なものに至る迄說き及ぼしてゐる。次に第二篇が

認識心理學で、こゝに於ては全く靜に對象を認識するものとしての人間を說いてゐる。

內容に於ける本書の特徵は、先づ第一に、斯かる發達的見解を最初に說いた點（而して之はこの學を理解せしめる上に於ても又教育上の見地からもよい試である）。次に各方面に於て最新の研究の結果、殊に形態學派の業績を充分に取り入れてゐる點（著者の努力と苦心の跡が覗はれる）。更に之も矢張り形態學派の主張による影響と思はれるが「感覺」と從來稱せられ來つた問題を感官知覺として、感覺概念の是正を試みてゐる點。

本書は上卷であつて、多分近日發刊せらるゝであらう所の下卷に於て感情、意志の問題が取扱はれるであらうと察せられ、從つて上下完備の上、之を批評する事が最も適當であらうと思はれるが、同學の氏のこの業績を喜び、廣く之を好學の士に薦むるの念急なるの餘り、こゝに少しく本書に對する卑見を述べ樣と思ふ。

現時の心理學界の傾向が一方には發達的方面に向ひ、又一方に於て形態學說が學界を風し靡つゝある事は疑ふべからざる事實である。本書がこの二つの事實を承認して、そのまゝ之を紹介する態度をとられた事は誠に無理からぬ事ではあるが、この兩者の關係聯絡について今少し明瞭な說き方が欲しい。換言せば第一篇と第二篇との聯絡如何である。一方が發達的見地をとり、一方が認識的見地をとつたのだから、兩者は全然別物であるといふならば、一應尤ではあるが然しいふ迄もなく常に全體的統一をなす吾々の意識は、假令學習の際に於てもその全體の學習形態の中には知覺形態も入り込むものであり、意志過程中にも感情的經過が渾一的に結合するものである以上、之等相互の關係の密接なる所以を、本論の最初又は知覺の最後にでも說明せられたならば、より效果的であつたのではないかと思はれる。更に問題は錯覺と形態である。之等は何れも從來の心理學書では知覺と別にして說かれてゐるが、寧ろ之等全部を知覺（殊に空間知覺）の題下で總括的に說いては如何なものであらうか。勿論空間知覺の部分のみが大となつて、他の觸、聽知覺に對して釣合がとれぬといふ問題があるなれば、少くとも錯覺と形態の問題とを斯く別々に「モザイック・アルテイッヒ」に並べるのでなしに、統一的批判的に述べられた方が效果的なのではないであらうか。

以上は叙述の方法に關する問題であるが、次に本書は氏の序文に於て記された所によれば、高等專門學校教科用として、並に進んで心理學に志す人々の爲に編せられ

たものであるこの事であるが、後者の爲に大に役立つ事勿論であるが、教科用としては、分量の點及値段の點で如何かと思はれる。卽ち上卷のみで可成り大部であり、更に下卷が之と同じ位あるものとせば、之を通讀するのみでも一週二時間では稍困難である。尙教科用とすれば定價の點も顧慮する必要がある。勿論紙質と言ひ、寫眞の鮮明さと言ひ、この定價(貳圓貳拾錢)が決しい高いといふ譯ではないが、上下二卷を教科用として使用する事が如何かと案ぜられる。そこで私は。斯かる確りしたものを參考書として造つて貰つた上、このものを教科用に適する樣に簡略にした(然しその編纂は本書の如く確りした仕方により)ものを出して頂いたならば、適當な教科用のものなき爲め不便を感じつゝある今、吾等の喜び更に大なるものあるべしと思はれる。

最後に本書には日本人の心理學的業績を割合に多く擧げてゐる點が面白く感ぜられた(松本博士、森田正馬氏、高木貞二氏の如き)。然し誤植(序、邊渡)脫字(九五頁欄外、七二頁七行、組織的)等もあり最後の人名索引にも脫落がある(Tの部、高木貞二氏等)

以上大分澤山の注文をしたが、然し從來のかゝる書物と比較して、その書き方と言ひ、說明の方法と言ひ、餘程確りした有用のものである。好學の士すべからく坐右に置く事をお奬めして止まぬ。尙本書の下卷が一日も早く生れ出でん事を待つ事切である。(飯田順雄紹介)

エストリン カーペンター　宗教學概論　增谷　文雄譯

哲學名著叢書第九編に收められたカーペンター著增谷文雄氏譯の宗教學概論を見る。本書は序言にもことわつてある樣に Comparative Religion 1913. の譯出であるが宗教學概論として題名を與へられてゐる事はやゝふさわしくない樣でもあるし、又事實內容も原著名の如く比較宗教である。宗教學概論又は概說と稱せらるゝ多くの著書をみるに概ね宗教意識の發達より論じて宗教の概念を決定せんとし起源を探索せんとして心理學的傾向によるものが多い。又原始土民の宗教意識を研究せんが爲めに現代の地球上の野蠻人の風俗習慣等よりして其宗教儀式を記述して文化人の過去の宗教を類推せんとし、殊に知識と信仰の問題や神性の問題を社會學的な見解に依らんとし哲學的な論述に、求めんとするものが多い樣である。本書はすでに其序論よりして東西の大宗教たる基督教と佛教との比較よりはじめ、更にモハメット教に及び歷史